

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

悪漢と英雄の変容：パラダイム・チェンジの時代 とピカレスク・roman

著者	日中 鎮朗
出版者	法政大学文学部
雑誌名	法政大学文学部紀要
巻	76
ページ	79-93
発行年	2018-03-13
URL	http://hdl.handle.net/10114/13770

悪漢と英雄の変容

— パラダイム・チェンジの時代とピカレスク・ロマン —

日 中 鎮 朗

1. マノンのピカレスク性と『マノン・レスコー』の語りの構造

アベ・プレヴォの『マノン・レスコー』(*L'Histoire du Chevalier des Grieux et de Manon Lescaut* 1731 年)は〈語りの構造〉に特徴を持つ。物語全体にはプレヴォの読者操作の意図があるが⁽¹⁾、まず、語りの構造はデ・グリュの友人ティベルジュがデ・グリュの告白を聞き取るという形式枠がある。その中で、さらにマノンの話を聞くデ・グリュが彼の視点で解釈しなおし、見直されたマノン像が提示されている。それを踏まえ、デ・グリュの告白のなかでデ・グリュによって変形されたマノンが語る話を受容したうえで、さらに語る(あるいは語り直す)デ・グリュ自身の物語(を読者が聞く)という多重な引用構造がなされている。こうした多層な構造がプレヴォの読者操作を支えているのである。すなわちこの物語は全体が長大な間接話法から成り立っているといっていよい。

前田彰一が「間接話法の言語上の意味とは、引用者の言葉と引用される他人の言葉との間にはっきりとした厳しい距離を保ちながら、他人の発話(言葉)を分析した上で引用・伝達するという点にある」(前田 231, 括弧・傍点は前田)という間接話法に関するバフチンの言説を要約しながら、次のように言うとき、それは『マノン・レスコー』に対する読者あるいは解釈者のとるべきスタンスを決める手がかりを与えてくれる。

このことを小説の世界に置き換えると、間接話法は、他者(作中人物)の発話(言葉)を語り手が分析した上で引用・伝達するということになる。したがって読者は、〈語り手〉による老婆の言葉の要約あるいは分析と、老婆のたどたどしい肉声との間にある「ズレ」と「重層」を読み取らなければならない。(前田 231, 括弧は前田)

ここで「老婆」と言っているのは、この文は芥川龍之介の『羅城門』を前田が引き合いに出して分析したものであるからであるが、『マノン・レスコー』においてこの老婆にあたるもの、つまり語り手の老婆の機能を果たしている人物は、ほかならぬデ・グリュである。女性を恋し、その女性に裏切られる男性が語るゆえに、どうしても後悔、憤怒、悲しみなどの悲劇性、感傷性や湿っぽさが伝達内容に絡まっ

てくる——マノンの発話（言葉）や行為を語り手デ・グリュが分析したうえでデ・グリュ自身が引用・伝達しているという位相に加えて、デ・グリュの告白を聞き取る小説全体の語り手である友人が「善良な青年の道徳的墮落と社会的転落」という序文にある視点からデ・グリュの発話（言葉）を整理しなおしたうえで引用・伝達しているという位相があり、さらに同じことをプレヴォーがなしているという三層構造がある——ために読者にはそうした語り手たちがかけるバイアスゆえに先入観をもち、どうしても見えにくくなってしまいが（そしてそれがデ・グリュと友人の意図であり、真意を隠したプレヴォーの表面的なカムフラージュである）、客観的に出来事、事実だけを取り出し、それらの経過を見れば、マノンはデ・グリュに対しても、貴顕のパトロンたちに対しても〈うまく〉やっているものであり、それは実は彼女が浮気を繰り返すという行為から、またさらには出来事の経緯から容易に見て取れるのである。マノンの生き方を女性の弱さとしたのは、その百年後の18世紀のブルジョワ啓蒙主義であり、19世紀に行われたマスネとプッチーニによる二つのオペラ化であるが、元来はマノンのアウトサイダーとしての自由闊達な悪びれない活躍が行われているのであり、それが権威批判、社会批判になっている。

すなわちデ・グリュに対しても、貴顕のパトロンたちに対しても〈うまく〉やっているという状況に焦点を当て、それを分析すれば、『マノン・レスコー』の物語は、善良な男性を転落させる妖しげな女性の物語から身分（マノンは庶民である）・家族環境（彼女はある行為によって父親に罰あるいは矯正のために修道院送りになる途上にあった）・経済（彼女は修道院送りになるところから脱走し、仕事はしてない）・「遍歴性」（鹿島 59）（具体的には、①田舎から都会へ、②脱走③さまざまな愛人とデ・グリュの間を経廻ること）とにおいて共同体社会の底辺・周縁にある女性が機知と知恵（狡知）によって時の権力者を誑かし、愛人となって贅沢を享受し、彼らを騙し、脱走を繰り返すという痛快な、自由な精神に基づく八面六臂の活躍をする女性の物語になる。最終的には権威や権力に対抗し、これを批判し、権威の醜悪さを露呈させることによって、社会批判性をも獲得する。このとき、マノンは機能的には文化人類学におけるアウトサイダー、マージナル・マンである。つまり、この物語は平民の破壊的活躍、諧謔、間拔けた連れ（ここではデ・グリュ自身）、社会風刺・批判、情事などといったピカレスク・ロマン（picaresque novel/novella picaresca）の諸要素をすべて備えている。すなわち、主人公のマノンはピカレスク・ロマンにおけるピカロ（ピカラ）でもあり、『マノン・レスコー』はピカレスク・ロマンとして読むことができるのである⁽²⁾。マノンのピカレスク性（悪漢ぶり）は確かに時代の価値規範から逸脱的、侵犯的であり、ときに犯罪的ですらあるが、それは冷酷な、非人間的な悪ではない。実際、物語の中で殺人を犯すのは実はデ・グリュであり、マノンではない。マノンの罪は風紀紊乱であり、結局は権威・権力を愚弄したことである。なぜなら風紀紊乱の相手はほかならぬ権威者・権力者だからである。

本論ではそうした分析を基に、ピカレスク・ロマンはその時代的思潮・思考がパラダイム・チェンジが行われる/行われつつある知的状況において生まれること、また科学技術（テクノロジー）をはじめ、諸価値の変容が現れている現代に書かれる小説にピカレスク・ロマンの諸要素が見いだせることを提示し、そのことが諸価値や規範、様々な手法が転換期にあることを逆に示唆してゆく関係にあることを示

し、その様相や意味の解明を目指すものである。

2. パラダイム・チェンジ — 時代精神への挑戦とピカロの誕生

『マノン・レスコー』が大貴族や高級官僚と「悪知恵比べ」で闘うピカレスク・ロマンであるのは時代のどのような性格に由来するのであろうか？ ピカレスク・ロマンが反権威である限りにおいて、既成の価値規範に挑戦しているのは自明である。『マノン・レスコー』における社会・経済上の既成価値規範への挑戦の歴史的実現は約 50 年後にフランス革命となって現れるが、『マノン・レスコー』は革命的精神を準備し、フランス革命へと向かう時代精神を体現している。パラダイム・チェンジは元来は科学者集団の知的枠組みの転換を指すが、そこから敷衍して、その時代の支配的な既成価値規範への挑戦がバターフィールドの言う「科学革命 (Scientific Revolution)」であり、それをクーンは「科学革命 (scientific revolution)」、「パラダイム・チェンジ (paradigm change)」、「パラダイムの転換 (paradigm conversion)」と名づけている。クーンが『科学革命の構造』で科学革命と呼ぶものは、通常科学 (normal science) の基本的前提を覆すものを避けられなくなったときの革新的な考えの受容、導入であり、新しい科学の追求とその規範性の獲得のことを言う。

And when it [normal science] does [goes astray] — when, that is, the profession can no longer evade anomalies that subvert the existing tradition of scientific practice — then begin the extraordinary investigations that lead the profession at last to a new set of commitments, a new basis for the practice of science. The extraordinary episodes in which that shift of professional commitments occurs are the ones known in this essay as scientific revolutions. They are the tradition-shattering complements to the tradition-bound activity of normal science. (Kuhn 6)

むろんこれは科学（自然科学）だけに妥当することではなく、専門家集団がもつ規範、価値観、手法などにおいて自然科学、社会科学、人文科学などのすべての諸科学に妥当する。文学、また文学研究においても自然科学の急激な展開により、文学（小説）そのものの内的変化、内的転換が始まり、また逆にそれによってパラダイム・チェンジの時代であることが認識されると考えられる。むろん、伝統的通常研究 — クーンの言う the tradition-bound activity — の専門家集団はこうした革新的な考えと対立し、それを圧迫・抑圧するのだが、それはわれわれの関心であるピカレスク・ロマンにおいては、例えば、教会、王権、貴族、神、身分ヒエラルヒーといった既成権威が、革新的な考えに対処するありようとパラレルである。

ケプラー、ガリレオ、デカルト、フック、ボイル、ハレイ、ニュートン、ホイヘンス、スピノザなどの名を挙げながら、村上陽一郎は「十七世紀ヨーロッパが、近代＝現代の自然科学のありようを、決定

的に定めた」(村上 15)とし、そこにバターフィールドの言うような「不連続面」を見出し、それが「近代自体の中に孕まれている」と考え(村上 19)、「このような不連続的な進行の過程」を「聖俗革命」と呼ぶ(村上 19-20)。その内容と意図は次のようなものである。

聖俗革命という概念によって切り出される一つの局面は、まさにここに言われている「全知の存在者の心の中に」ある真理、という考え方から、「人間の心の中に」ある真理という考え方への転換であり、「信仰」から「理性」へ、「教会」から「実験室」への転換であるからである。私はこうした動きのなかに、真理の聖俗革命、真理の世俗化、知識の世俗化を見たいのである。(村上 21-22,「ここに言われている」というのは、シュンクの『ヨーロッパ・ロマン主義の精神』のなかのアイザイア・バーリンの序文のこと—引用者注)

考えの場が「信仰」から「理性」へ、「教会」から「実験室」へと転換しつつあり、真理の所在が神から人間へと転換しつつあるとき、知の起源と知の作動(実はこの両者は根本的に異なるのだが、いずれにせよそうした全知全能)の在り処をひとまずは留保でき、そして留保したとき、思考の自由が保証される。『マノン・レスコー』の出版から10年後、『百科全書』1751年版の第一巻の扉絵における「真理」に対する諸学の憧れの構図——言うまでもなく18世紀は啓蒙主義の時代であり、真理は光であり、その光を発見し、照らされることが啓蒙である——について村上は述べているが(村上 37-40)、『マノン・レスコー』がそうした時代の中にあつたことに改めて注意を喚起しておきたい。こうした〈自由〉という視点から見たとき、マノンが選択した生き方は都市において伝統的な倫理的規範の範囲の外で生きるピカロ＝アウトサイダーの生き方を示すだけでなく、それによって伝統的既成規範それ自体を批判する視点を与える。たとえば、マノンは修道院送りの途上であつたが、脱走する。こうした設定自体が教会、あるいは神の権威からの脱走、逸脱と捉えることができるのである。また、デ・グリュは有能な修道士として認められていたが、マノンと関わることによってそこから外れた彼を修道院長が監禁し、圧力をかけるとき、それは教会の権威がすでに疑われていることを示しているのである。それは当時の科学者やのちの百科全書派と同じように、神を否定しているのではなく(実際、デ・グリュは神を疑うことは一度もない)、教会権威を科学者の目で見ることによって神を留保するのである。このように神は神として信仰するが、それが物事を進行させる基準ではないということが聖俗革命の核心である。そしてデ・グリュの場合は、マノンが選択判断の基準となっているのである。

自然の秩序、法則が、神を棚上げにしたうえで、自然自身のなかに求むべきものになったのに平行して、倫理、道徳という人間の秩序の由来もまた、神を離れたといえるからである。人間の徳というものが、キリスト教的信仰に全く依存しないという考え方、モラルと信仰とを切り離すべきであるという考え方は、人間の世界における聖性を、世俗性によって置き換えようとする方向とみることができる。(村上 66-67)

そうした機能を担うものとして——当時の自然科学や人文科学分野でこうしたことに思い至った学者以外では——犯罪者、悪党を含むあらゆる意味でのアウトサイダーを挙げることができよう。文学においてはそうしたアウトサイダー的活躍をなすピカロがこの時代においては機能的に可能性のある存在であり、またふさわしい形態・役割を担うと考えられる。この後に来るロマン主義の時代では、犯罪性、ましてやコミカルな要素を伴った軽やかな犯罪性への評価はロマン主義の性質上、薄れる。ピカロの犯罪性、とりわけここではピカラたるマノンの愛人生活という倫理規範の逸脱は「「自由思想」《libertinage》という言葉が、「道徳的な放縦」を本来意味している」（村上 67）と言われるように、その本来の意味と重なるのである。

「知識の平等を主張し」、真理やその知識が「全知の存在者」にはなく、正当な方法で誰にでも得られると主張するとき、このことはなにも自然科学分野やピカレスク・ロマンの時代だけにあてはまるのではないし、物語内世界への適用だけの問題でもない。「全知の存在者」を例えば文学研究の権威者と読み替えれば、それがまさに IT や AI 革命の現代においてその権威が失われてゆく過程に当てはまり、逆に言えば、現代は 17 世紀に続くそうした「科学革命」、「パラダイム・チェンジ」、「パラダイムの転換」、「聖俗革命」といった不連続の時代にあることを現実の諸フェーズが指し示し、文学研究の危機の原因のひとつもそこにあることがわかる。平野啓一郎はこうした文学の危機を感じ取り、分析しながら作品を作る数少ない作家の一人である。現代という時代における文学の特殊な危機について警鐘を鳴らすが、文学（批評・研究）関係者のあまりの反応の鈍さに herausfordernd にならざるをえないことが見て取れる。まず平野は文学が特権的な位置を占めるハイカルチャーであることを前提にしていない。彼の文学（あるいは芸術）の位置づけ、言い換えれば文学（あるいは芸術）に対するある意味での定義といえるものは、次の文に明確に現れている。

小説や音楽や映画や漫画といったジャンルの作品は、サイエンスの論文や現代美術の作品のように「一部の専門家に評価されていれば成立する」というものとはちがっています。（平野 212）

小説と漫画が同列にされていることは現代では共通の認識といえるが、ここで、現代美術が——芸術のジャンルであるにもかかわらず——サイエンスの論文のグループに入っているのはそれが経済行為、すなわち現実世界の経済活動を中心とした生活と直結しているからであろう。これを平野の同世代といえる伊坂幸太郎（平野は 1975 年生まれ、伊坂は 1971 年生まれ）が描く『ラッシュライフ』を例に見ておこう。ここでは、絵画を色のついた株、「絵を投資の素材として扱う」（伊坂『ラッシュライフ』265）巨大画廊とビル群のオーナーである戸田のもとを出て、「ピカソの画商」といわれるカーンワイラーのような画家と画商の信頼感を夢見て独立するが、協力を誓い合った画家たちに裏切られ、戸田に潰された佐々岡のエピソード（『ラッシュライフ』は 5 つのエピソードから成り立っている）が描かれるが、まさにその戸田の行為がこれに当てはまるからであろう。「だって、そもそも小説って、なくてもいいものですよね。ウソが書いてあるだけのものなんですから」（伊坂「物語の風呂敷は、畳む過程がいち

ばんつまらない」, 226) というように、伊坂もまた、小説＝虚構が現実世界のなかで保つ位置をかつての権威やハイカルチャーとしてではなく、漫画や映画、ドラマと並ぶ虚構ジャンルの一つとして認識していると考えられる。ただし、言語構造物である小説が持つ「書けばそうなる」、「なんでもできる」(伊坂「物語の風呂敷は、畳む過程がいちばんつまらない」, pp. 230f.) というその虚構性の力の一面を伊坂は信じるゆえに、その裏面である〈読者が本を閉じてしまえば終わり。その虚構世界は現実世界から消える〉という限界性の認識から出発する小説の価値再構築に向かうには至っていない。

平野は自分の作品が難解でマニエリスティックであるゆえにこそ、読まれること/読まれないことを非常に重視している。「小説はとにかく読まれないことには何にもなりません」と言い、自分の小説の「日本語を解体する、変える」という意気込みも、それを読むのが5,000人であれば、それは日本の人口の0.004%であり、「ネットで日々、膨大にやり取りされている日本語の変化の規模とは比べものにならないとして、次のように警告する。

しかも、過去の作品はデータ化や新訳などで現代小説を量的に圧迫し続けている。どんなにすばらしい作品でも、数千人にしか読まれなければ、数年後に「なかったこと」にされてしまうという危機感を僕は持っています。しかも、ウェブ2.0以降の状況では、作品と読者を仲介するのは評論でもコラムでもなくて「読者」なんです。(平野 208)

現代がその科学技術の急速かつ不連続的な進展ゆえにパラダイム転換期にあることは文学と無縁ではないこと、それどころか大きな影響を与えていることを平野は認識している。また、「評論」や「コラム」といった特定の場に依拠する権威の無効化も見抜き、いわゆる普通の「読者」の重要性を説いている。従って、平野の想定する読者はヤウスやイーターの読者受容論(含意された読者 *implizierte Leser*)の射程を超えていることにも注意しておきたい。平野はレジス・ドゥブレのメディアロジーに大きな影響を受けたと述べているが(平野 209)、それは「作者、作品、編集、営業、書店、読者と続くライン」(平野 210)を考えていることからわかる。考えてみれば、作者・作品・読者というトリアード(Triade, 英 *triad*)では、作者・作品間は直結しているか、あるいは例えば現代では間に編集者が介在するが、実際には作品が読者にわたるには流通というものを考えねばならない。それらは経済に関係するため、文学理論では排除されてきたが、メディア(媒介)を考えればそれに新たな位置づけと機能の解析を与えることが必要となってくるであろう。平野の『ドーン』ではそれらが論じられる。興味深いのは平野が梶原一騎に「超人追求」というテーマを見出し、それについて「従来の社会のヒエラルキーに参加できなかったアウトローも、それに匹敵する、あるいはそれ以上に価値のあるオルタナティブなヒエラルキーを昇っていくことで、自分の存在価値を確認できる」(平野 200)と言っていることである。アウトローはアウトサイダーであるから、これはこの点においては確かに、ピカロの反権威と共同体社会の規範への疑念、そして社会的上昇というプロセスと重なるように思えるが、「その超人間的な能力を獲得するためには、きわめて過酷な修業をしなければならない」(平野 200)という点において、

悪びれず、知力と悪（悪知恵）で軽々と渡り歩くピカロとは根本的に異なる。1970年代には「過酷な修行」が必要であった、言い換えれば、過酷な修行をして社会のヒエラルキーを昇ることができたならば、その時代はまだパラダイムの転換期ではなかったと言える。実際、科学技術的には80年代の胎動期を経て90年代から本格的なIT時代に入ってくるのである。

3. ピカレスク・ロマンの現代性とパラダイム・チェンジ

R. W. B. Lewis はその著 *The Picaresque Saint* において、Camus, Moravia, Silone, Faulkner, Greene, Malraux など論じながら、もっぱら次の2点を強調している。ひとつはそれらの主人公（hero）には——彼がたとえ奇妙で、風変わりで、邪悪であっても——神聖さを体現し、聖者（saint）の特徴を帯びること、もうひとつはそれが「現代小説の代表的な人物像」であることである。

It is the figure of a saint: a very peculiar kind of saint, embodying a peculiar sanctity....

The figure I am calling the picaresque saint tries to hold in balance..., by the very contradictions of his character, both the observed truths of contemporary experience and the vital aspiration to transcend them. (Lewis 31)

デ・グリュに対するマノンの一途な思いとマノンの繰り返される浮気、そしてデ・グリュへの裏切りがマノンにはごく自然に混在する。つまり、Lewis が述べる性格における「矛盾」という特徴とそれゆえにバランスを保とうとする生き方はまさにマノンが抱え持つものである。そもそもマノンは田舎から出奔した下流の娘である。当時の現実世界や現実で体験することは田舎の娘が持ちうる神を軸とした世界の基本的情報を超えているのであり、生きるためにその世界観や基本的情報を超えようとし、また超えねばならず、貴族に取り入り、愛人となるのである。逆にいえばそもそもそうした力と欲望があるからこそ、田舎を出奔し、修道院送りから逃げ出し、デ・グリュをつかまえているのである。マノンはまさに *saint manqué* というべきものである。そうした二重の基準が都市において明白に現れ出た時代でもあった。つまり、生活倫理基準となる神（聖）と経済原理や科学に従った現実原則基準（俗）という二つの基準が入れ替わってゆく時代であったことをマノンの生き方は反映している。

Lewis は1940, 50年代を *contemporary* と捉え、その時代の特殊性を「逆説的な時代（our paradoxical age）」と述べるが、第二次大戦前後という時代的特徴は、戦争（への危機感）ということに収斂されるのであろうか？むしろ、戦争は結果であり、問題は社会体制の崩壊、民主主義の脆弱さ、大衆や世論の欺瞞性などそれまでの主たる前提的、基盤的観念の有効性や妥当性が疑わしくなったことであり、その決定的転換点が第二次大戦前後なのである。それは社会、政治、思考のパラダイムの転換が起こる時代である。時代の矛盾は前述の科学革命、聖俗革命の起こった17世紀にもあり、実際には Newton の *Opuscula mathematica, philosophica et philologica* で Castilloneus (Johann von

Castillon, 1708-1791) が編集したものは 1744 年にローザンヌとジュネーヴで出版されたように — そしてそれについてヘーゲルがコメントするのは 1818 年のことである (Hegel 25) —, 科学のパラダイム転換の 17 世紀の諸発見が〈現実＝世俗世界〉へ影響を及ぼし, その姿を現すのは 18 世紀と考えてよいだろう。それがピカレスクの時代でもある。ニュートンのこの著作と『マノン・レスコー』出版の 1731 年とは 10 年の差でしかない。

Lewis が神ではなく, 人間の共同体社会にある聖なるものへの献身がこの未熟な, 不十分な聖者の特質とするとき, それはまさにマノンの特質であると同時にマノンの時代をも言い表している。

Paradoxical as he is, the picaresque saint is the logical hero of our paradoxical age. ...

In the second generation, no less revealingly, the hero has tended to be an apprentice or saint *manqué*. ...

The fictional saints of second generation fiction are men dedicated not so much, or not immediately, to a supernatural god as to what yet remains of the sacred in the ravaged human community. ...the image of the saintly is the image of participation in the sufferings of mankind — as a way of touching and of submitting to what is most *real* in the world today. ... he [contemporary hero] is apt to share not only in the miseries of humanity, but in its gravest weaknesses, too, and even in its sins. He is not only a saint, ...He is a picaresque saint. (Lewis 31-32)

paradoxical な時代において picaresque saint はその役割, 機能, 成し遂げることはもとより, その存在自体が picaresque なのだが, Lewis の言う「荒れ果てた人間社会にまだ聖なるものとして残っているもの」に着目するとき, 神あるいはイエスのおこなう行為ではなく, 人間の行為としての人類の苦しみ, 苦悩, 悲惨さ, 弱さ, 罪への共感やその共有こそが重要であることがわかる。これは一見, リヒャルト・ワーグナーの『パルジファル』における〈共苦〉Mitleid (mitleiden) を想起させるが, 神の秘跡, 聖杯伝説と直結する純粋で無知な愚か者という性質を与えられたパルジファルではなく, 神から離れ, 不純で目先の利く犯罪者 — とはいえ, その矛盾性, 二重性ゆえに実は神を盲目的に信仰しないにせよ常に意識し, 正面から問い, ある部分においては純粋で, 一途である — つまり, ピカロの行為・特質なのである。それこそが単なる理念ではないもの, 現実世界のリアルなものであり, そのことをほかならぬピカロ, ピカレスクな聖者, すなわち〈悪漢＝聖者〉が理解しているということである。

Hans Mayer が Ernst Bloch の『希望の原理』に一定の評価を与えつつも, 批判する点はまさにその点に他ならない。つまり, ブロッホは理念としての人類のみを対象にし, 個々の人間の苦悩, すなわち現実世界の苦悩のリアル (あるいはリアルな苦悩) については語っていないとマイヤーは批判するのである。

Kraftvoll spricht Bloch von den Erniedrigten und Beleidigten, meint aber nur die Gemeinsamkeit im Schicksal, nicht den erniedrigten und beleidigten Einzelnen, dessen Tun und Leiden keiner allgemeinen Gesetzmäßigkeit subsumiert werden kann. (Mayer 10)

ブロッホやプラトン、ルソーが包摂しえない、いや押しやられ排除されて (weggeschoben) しまった「他のものに還元しえない、わき道にそれた主体性」(die unreduzierbare und abseitige Subjektivität) (Mayer 10) が社会の中で存続していくことによってその時代とパラダイム転換期との関係が推察されるのである。ピカレスク・ロマンが登場するスペイン中世文学の時代にもこのことは当てはまった。アウトサイダーは存在し、活躍し、規範を破るが、当然ながら、それによって時代の宗教基盤や身分制度や規範が崩れることはなかった。アウエルバッハもスペイン中世文学の時代について次のように述べている。

... in der Welt ist zwar alles ein Traum, doch nichts ein Rätsel, welches auf Lösung drängte; es gibt Leidenschaften und Konflikte, aber Probleme gibt es nicht. Gott, der König, Ehre und Liebe, Stand und ständische Haltung sind unverrückbar und unbezweifelt, und weder die tragischen noch die komischen Gestalten geben uns Fragen auf, die schwer zu beantworten wären. (Auerbach 317)

従ってブロッホのように大枠しか見なければ、何も変化はなかったということになるが、しかしだからといってなにも起こらなかったわけではないのである。ピカロの、そしてマノンの活躍はそれを示している。とはいえ、ピカロの活躍があっても世界に「愛情や闘争はあっても、問題はなかった」、そして「神、王、名誉、愛、身分、身分的作法」に変化はないとすれば、実際のところ、無意味なのではないのかという問いに対しては、ブルーメンベルクが救いようのない世界、世界の救いようのなさこそが逆説的に必要であるとする考えが答えになるだろう。

Es bedarf des Unheils der Welt, aber eben; der ›Welt‹ im Vollsinn, um dem Heil dessen, was ›nicht von der Welt‹ sein soll, seine Erwartungsevidenz zu verschaffen — was auch immer epochal oder episodisch als solches Unheil und Heil gesehen werden mag. (Blumenberg 13-14)

では、一般的に、そしてとりわけ現代において、価値規範（そしてその体现者）にとって悪や犯罪であること、あるいは悪や犯罪をなすアウトサイダー的存在にとって「悪」や「犯罪」はどのような意味を持つのであろうか？

Lewis もやはり picaresque の語を picaro から派生した形容詞で悪漢 (rogue) を意味するという定

義の部分では変わらないが、「犯罪性」を持つことも指摘している (Lewis 32)。犯罪——マノンが行ったことは風紀紊乱であれ当時における犯罪であるゆえに、官憲に逮捕され、法により収監、そして追放される——として現出するまさにその根源がピカロの持つ積極的な意味であると Lewis は結論付ける。つまり、ピカロの impurity のなかにこそ「生への信頼」「仲間意識」が実現される源泉がある。ここでの「仲間意識」(companionship, Henry James の用語では fellowship) は恋愛とも友情ともややスタンスを異にしていると考えられる。それは苦しみなどを分かち合うことであり、例えば現代日本において、原初的な「仲間意識」が尾田栄一郎による『ワンピース』のテーマとなっていることを思えば (安田雪『ルフィの仲間力』)、海賊のルフィ、ゾロ、ウソップたちが当然——そもそも海賊なのであるから——ピカロでありながらも、ワンピースを追求するクエスト=探求物語 (漫画やゲームの世界では聖杯伝説、聖杯探求をそのままストーリーの骨格とすることがしばしばある) の仲間であり、従ってピカレスクあるいは「仲間意識」はきわめて現代性の高い特質をもつといえるのである。

They are outsiders who share; they are outcasts who enter in. It is just by taking on some of the wretchedness of the sinful, the persecuted and the dispossessed that they can experience what Henry James once called a “tragic fellowship” with suffering humanity. (Lewis 33)

ピカロは共同体からのアウトサイダー、追放された者である。しかしそれゆえに罪ある者、迫害された者、追放された者の悲惨さを引き受け、共有するのであり、それによって「仲間意識」を経験できるという Lewis の論理は受け入れやすい。マノンもまた共同体からのアウトサイダー、追放された者であるのは設定上、明白であるし、元来インサイダーである高貴な出自のデ・グリュもマノンに恋するあまり、やがて共同体からのアウトサイダー、追放される者となってゆく。つまり、アウトサイダー、追放された者であるピカロとしてのマノンにデ・グリュが共感し、その惨めさや罪を共有してゆくというストーリーが成立する。一方、その方向性だけではなく、やがてデ・グリュも悲惨さや罪を持つとき (牢獄から脱出するときに殺人を犯すのはデ・グリュである)、そのデ・グリュの惨めさや罪を共有してゆくのは今度はマノンのほうなのである。ここに “tragic fellowship” や companionship を見て取ることは当然可能だし、かつ必要でもあるが、そこに Lewis はさらに彼の論じる the second generation の小説の特徴としての encounter を見出している。encounter はそうした小説を〈旅の物語〉、〈追跡の物語〉としていると述べる。

The tragic fellowship I speak of is accomplished, in narrative terms, by a series of encounters — encounters between the hero and the beings and customs it is his purpose to outwit; and between the hero and those rare beings with whom communion may be fleetingly possible. The representative story of the second generation is thus the story of a journey, or more often of a chase. (Lewis 34)

まさに、このことが『マノン・レスコー』に妥当する。『マノン・レスコー』は「生への信頼」の探求の物語であると同時にまた必然的に〈出会いの物語〉であり、〈旅の物語〉、〈追跡の物語〉として読むことができるのである。つまり、Lewisの述べる諸条件、諸特性においても、『マノン・レスコー』は典型的なピカレスク・ロマンの特徴を備えている。マノンが対抗し、破壊しようとするのは当時の社会慣習や身分制度であり、またそれに基づく恋愛のヒエラルヒーであり、出し抜くのは浮気相手の貴顕の権力者たちであり、それゆえにこそ彼らは怒り、社会制度の既得権を守り、その固定化に役立つ〈法〉をもってマノンを追いつめ、刑罰を与えるのである。

またマノンの性懲りもない浮気はデ・グリュへの純粋な思いと相殺されたり、あるいはそれが根本にあると考えられるので読者はマノンに感情移できるのである。社会的上昇を目指す知力と悪（悪知恵）が根本にあるので、その反権威性は小説の基本的な構成条件として読み取ることができるのはストーリー上からしても当然であるが、スペインよりもやや遅れ 17, 18 世紀にフランスを中心とした西欧においてピカレスク・ロマンが流行するのは、その時代において社会共同体の支配者層・上流階級のなかで既存のモラルを基盤とした共通認識的倫理（モラル）共同体が熟してきたからであり、またそれに応じて、批判的精神が育成され、それがピカロ/ピカラの活躍へと投影されるからである。ピカロ/ピカラに排他的な moral community に対抗する彼らのありようをシェリルは次のように述べる。

Nor does this new (anti-)hero on the scene enact out of heightened romantic character or idealized duty some noble errand on behalf of the larger moral community: he or she parries and thrusts, self-protects and aggresses, reflexively against a “moral” community that would as not do him or her in. (Sherrill 15)

ピカロのこうした行為は歴史的な流れのなかで必然的に生じると考えられる。マノンのピカレスクな、自由で軽やかな反権威的行為は貴族階級と富裕市民層との社会的対立の背景にある財政的権力・機能のシフトを反映しているだけではなく、世界を読み解く指標を宗教（的精神）から科学（的精神）へシフトさせる思考が知的教養層や科学者だけではなく、一般の市民層の思考機制にまで入り込んでいたことを表してもいるのである。アベ・プレヴォが貴族階級出身でありながら（かつ、その名が示す通り、僧侶階級をも代理表象する）、実際にその階級からの脱走を何度も図り、性と階級を逆転させてマノン・レスコーという女性に彼の思考を代理表象させることで、結果として 18 世紀半ばのヨーロッパの社会だけではなく、思想的な領域の変化までを表わすことになった。そのためにはマノンは単にうぶなデ・グリュを惑わし、浮気をやめられない意志薄弱でアンモラルな妖婦（またその意味での、ファム・ファタル）ではなく、ましてや貴族と庶民という階級差に愛が引き裂かれる健気で純粋な少女などではなく、自由にまた縦横無尽に貴族社会と純粋な青年の心情を駆け巡り、弄び、破壊し、回復する女でなければならなかったのである。こうして、picara という機能を果たすヒロインが誕生する。旅、遍歴はピカラ/ピカロの特質であるだけではなく、ピカラ/ピカロこそが人々が remedy を見出す源泉でもある。

ではマノンにとってデ・グリュの愛はどういう意味を持っていたのだろうか？ デ・グリュに愛されつつ浮気を重ねるマノンにとってデ・グリュの愛は——感謝こそ口にはするが——当初は理解できないものであったと思われる。しかし、何度浮気しても怒らないデ・グリュにマノンはモラルの侵犯の仕方をむしろ学んだといえる。Stegmaier に従えば、そうした対話的な二人の関係の下でのみ個々のモラルの関係が自然と止揚され^{エーティク} Ethik に変わるのである。

Empörung, moralische Aggression, gilt aber selbst als unmoralisch....Moral im Umgang mit Moral ist unter dem Gesichtspunkt der dialogischen Orientierung aber die Ethik selbst. (Stegmaier 156)

モラルを背景としたモラル的愛は非モラル的なのである。そうした journey あるいは chase という筋の中で愛情はもちろん一致してゆくが、当時の社会慣習、社会制度に対する闘いという点でもまた二人は一致してゆく。このとき、マノンの語る愛の言葉とは何なのか？ あるいは、なぜ社会慣習、社会制度に対する闘いを行っている人間が愛の言葉を語るのか（語らざるを得ないのか）？ マノンの遍歴性からして愛を語るマノンはトロバドールに他ならない。アガンベンによれば、トロバドールにおける言語は彼らの体験の言語化ではなく、愛を言語化することが愛の体験なのである。アガンベンはそれを次のように説明する。

トロバドールたちはすでになんらかのトポス〔場所〕に保管されている論拠を想起しようと欲しているのではない。そうではなくて、むしろ、あらゆるトポス中のトポス、すなわち、本源的な論拠としての言語活動の生起そのものを経験しようと欲しているのである。(…)「アモール」(amors) というのが、トロバドールたちが詩的言葉の到来の経験にあたえた名前である。彼らにとっては、愛こそは卓越した意味でのラソ・デ・トロバール〔発見法〕なのであった。(アガンベン 160-161, 強調点と括弧は原文)

マノンにとっても愛を語ることは、その言語活動によって彼女が社会の中の自己を知るためのラソ・デ・トロバールを経験することである。それはつまり、「(…) そのトポスそのもの、言語活動の生起という出来事そのものを愛と詩の根本的な経験として生きようとする試み」(アガンベン 161, 強調点は原文)なのである。

明らかにデ・グリュはマノンに影響され、社会体制内存在から、アウトサイダー、アウトキャストに転向してゆく。彼らがアメリカに向かうのは、新しい社会制度を期待して古いヨーロッパ、いや、旧パラダイムの地を捨てて、新しいパラダイムに入ってゆき、刑罰の地を愛が成就する新天地に変容させるという〈探求〉^{クエスト}をなさそうとするからである。結果的にはそこでもマノンの美しさがあだとなって悲劇となるが、それは彼らが流されてゆくヌーヴェル・オルレアン（ニューオーリンズ）にはまだ本国フランス

の既成価値規範が生きているからであると同時に、悲劇性は大衆好みのドラマツルギーとして構成されるからでもある。

むしろ、アメリカという新天地において男女の恋愛、つまり、性欲や本能がどのような形を形成するかという問題を見出すことが〈アメリカ〉が『マノン・レスコー』という作品の最初と最後に現れることの大きな意味を照らし出す。ここにおいてオーウェルの『1984年』にせよ、ハクスリーの『すばらしい新世界』にせよ、村田紗耶香の『消滅世界』にせよ（この小説では、男女・夫婦のセックスは戦争以前の昔の交尾の形式とされ、今では通常は人工授精となり、セックスはまれになり、「セックスなんて、もうこの世にないのではないだろうか」（村田 145）と思われる世界でセックスをする苦悩が描かれている）、多くのユートピア/ディストピア小説では性がそのユートピア/ディストピアの世界を揺るがす要素となるのであることを考え合わせる必要がある。その視点で見れば、『マノン・レスコー』をピカレスク・ロマンの視点から考察することは、この小説が管理化された世界と戦う起爆剤であることを浮かび上がらせ、また現代世界が孕む問題を照射するのである。

註

- (1) 拙論「歴史的、社会的、文学的ファム・ファタル像の変遷」（『言語・文化』第14号、法政大学言語文化センター、2017年）および「19世紀ヨーロッパ市民社会における女性の性の排除構造」（『法政大学文学部紀要』第72号、法政大学文学部、2017年）参照
- (2) 拙論「ピカラの快楽——ピカレスク・ロマンとして『マノン・レスコー』——」（『言語・文化』第15号、法政大学言語文化センター、2018年）参照

Works Cited

- Agamben, Giorgio. *Il linguaggio e la morte*. (邦訳 ジョルジョ・アガンベン, 『言葉と死』筑摩書房, 上村忠男訳, 2009年)
- Auerbach, Erich. *Mimesis*. (7. Auflage) Bern: A. Francke AG Verlag, 1946. (7. Auflage 1982.)
- Blumenberg, Hans. *Die Legitimität der Neuzeit*. (Erneuerte Ausgabe, stw1268) Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1999.
- Hegel, Georg Wilhelm, Friedrich. *Exzerpte und Notizen (1809-1831)* in *Gesammelte Werke*, Band 22, herausgegeben von Klaus Grotzsch, Hamburg: Felix Meiner Verlag, 2013.
- Kuhn, Thomas. *The Structure of Scientific Revolutions*. (fourth edition) Chicago: The University of Chicago Press, 2012.
- Lewis R. W. B.. *The Picaresque Saint. Representative Figures in Contemporary Fiction*. Philadelphia & New York: J. B. Lippincott Company, First Keystone Edition, 1961.
- Mayer, Hans. *Außenseiter*. (Suhrkamp Taschenbuch 736) Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1975
- Prévost, Abbé. *L'Histoire du Chevalier des Grieux et de Manon Lescaut*. Genève: Librairie Droz, 1953.
- Sherrill, Rowland A.. *Road-Book America. Contemporary Culture and the New Picaresque*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2000.
- Stegmaier, Werner. *Diplomatie der Zeichen: Orientierung im Dialog eigener und fremder Vernunft*. In *Fremde Vernunft* (herausgegeben von Josef Simon und Werner Stegmaier) stw1367, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1998.
- 伊坂幸太郎『ラッシュライフ』新潮社, 2002年（引用は改稿された新潮文庫版, 2005年）

- 伊坂幸太郎「物語の風呂敷は、畳む過程がいちばんつまらない」木村俊介との対談，木村俊介『物語論』所収，講談社現代新書，講談社，2011 年
- 平野啓一郎「明日につながる今日を見つけたかった」木村俊介との対談，木村俊介『物語論』所収，講談社現代新書，講談社，2011 年
- 前田彰一『物語のナラトロジー —— 言語と文体の分析』彩流社，2004 年
- 村上陽一郎『近代科学と聖俗革命』（新版），新曜社，新版 2002（初版 1976 年）
- 村田紗耶香『消滅世界』，河出書房新社，2015 年
- 安田雪『ルフィの仲間力』アスコム，2011 年

Transfiguration of Heroes and Villains: Age of Paradigm Conversion and Picaresque Novels

NITCHU Shizuo

Abstract

Abbé Prévost's novel, *L'Histoire du Chevalier des Grieux et de Manon Lescaut* (1731), is constituted of three narrative viewpoints, i.e., that of the author, substantial narrator des Grieux and his friend, a listener of des Grieux's confession. Because of the multiplex viewpoints, the multiplex structure of quotations and their intention to manipulate the readers, the novel succeeds in misleading the readers into interpreting the heroin, Manon as *femme fatale* in a traditional sense.

Employing a narratological and a historicist approach, this study reveals that it is proper to regard the novel as a picaresque novel/ novella picaresca, and therefore the heroin, Manon not as *femme fatale*, but as *picaro/picara*, hero/heroin in a picaresque novel. Manon functions as an outsider (outcast from a community), i.e., a marginal man which a cultural anthropology defines. Set free from established notions or existing traditional values, she acts almost unrestrainedly with her free mind, wit, intelligence, and villainy in the complex relationships of the characters of the narrative. Through her tradition-unbound activity against a power or an authority and by a <companionship> and <a series of encounters> (R. W. B. Lewis), she finally overcomes her social, sexual and economic inferiority and essentially plays a role of criticizing them and revealing their vice.

Based on an analysis of the relationship between the <paradigm conversion/change>, which Thomas Kuhn has introduced and used as an explanatory notion to a scientific revolution subverting "the existing tradition of scientific practice" (Kuhn) and the era of picaresque novels, this study argues that the emergence of picaresque novels corresponds to the social, political, moral, economic and even scientific stagnation. At the same time, this study finds that a parallel between the <paradigm conversion/change> and picaresque novels exists not only in western literature, but also in Japanese literature in the 21st century.